
モダンの終焉と貧困の変容（１）

日本文理大学 鈴木 琢 真

１．はじめに

表題は二つの疑問文から成り立っている。すなわち、モダンという時代は終焉を迎えたのかどうか。そして、貧困という問題は新たな変容をとげたのかどうか——という問いである。これら二つの問いを掲げた理由は、今回の統一テーマ「ポストモダンにおける貧困とソーシャルワークアプローチ——貧困の今日的現状と新たな福祉課題を探る——」に散りばめられた言葉を目にすると、ここには「今日」が「ポストモダン」と命名されるべき時代であり、この時代にあっては「貧困」が「新たな福祉課題」を「ソーシャルワーク」に突きつけているということが、いわば自明の前提として織り込まれているように思われるからである。

たしかに、時代は大きく変化したように見えるかもしれない。貧困をめぐるディスコースも多様な衣装をまとうようになったのかもしれない。しかし、この変化を「モダン（近代）」の「ポスト（後）」の時代に突入した結果であると考えていいのだろうか。むしろ、「ポストモダン」という手垢にまみれた言葉を用いることによって、かえって貧困の現実が覆い隠されることになりはしないだろうか。「ポストモダン」という言葉は、貧困の現実を明るみにもたらすためには、いささかミスリーディングなのではなかろうか。

本稿の課題は上述の疑念を確証することにある。そのために、本稿はまず「ポストモダン」という概念を再検討する。そのさい——もはや常套手段であることを承知の上で——J-F.リオタールとJ.ハーバマスの論争を手がかりにしたい。次に

本稿は、「ポストモダン」が時代を画する（歴史的）概念ではなく、それ自身がモダンの延長上にあること、より正確に言えばモダンのロジックが先鋭化した形態であることを示す。そして続稿では、こうしたモダンのロジックのもとで、貧困がどのような課題として現れてくるのかを明らかにしたいと思う。

２．ポストモダンの概念

ポストモダンだって！ 何をいまさら——という気もしないではない。1980年代——日本中の誰もが浮かれていた。「バブルだ、ワッショイ」の掛け声の隙間から、溜息のように洩れた言葉——それが「ポストモダン」だった。

ところが、この言葉は、哲学・思想オタクの心を虜にするには、十分すぎるほど魅力的だった。「大きな物語」の終焉、そして「小さな物語たち」の氾濫——リオタールが『ポストモダンの条件』（1979年）で下した時代診断は、「自分探し」などという出口のない試みに疲れた者にとって、いわば福音書のような役割を果たしたのであろう、またたくまに彼／彼女らのあいだに広まっていった。ポップカルチャー大いに結構。サブカルチャー大いに結構。カルチャーであれば何でもいい。むしろ、カルチャーなどと大見得を切らないパフォーマンスこそ望ましい。既存のディシプリンに収まりきらないのであれば、カルチュラル・スタディーズなる新しい知を作ってしまうといい。すべての知（物語）を統合するような「メタ物語」など、しょせん存在しえないのだから。

いくつもの「小さな物語たち」のあいだを軽快

に飛び回ろう。定点を求めないようにしよう。游牧民（ノマド）のように放浪しよう。それがポストモダンという新時代の生き方だ。ポストモダンは、学説ではない、理論ではない、生き方である、実践である。そんなディスクールがまことしやかに囁かれる。いつのまにか「ポストモダン」は時代の流行語になっていた。学問、思想、芸術など、あらゆる文化的営みの世界をポストモダニズム¹⁾が席卷した。

しかし、ほとんどの流行語がそうであるように、「ポストモダン」もまた人々の記憶から急速に薄らいでいく。いまでは「ポストモダン」を口にするには、多少の気恥ずかしさを覚えないわけにはいかない。だから、「ポストモダンだって！ 何をいまさら」なのだ。もはや「ポストモダン」という記号は消費されつくした。ポストモダニズムが去った後に残されたものは、J.ボードリヤールの口吻をまねて言えば、「キツチュ」や「ガジェット」といったがらくたの山にすぎない。はたして「ポストモダン」とは何だったのか。それは現代の貧困を語るのにふさわしい概念なのであろうか。

リオタールは言う。ポスト工業社会の到来と情報技術の高度化によって、モダンのディスクールを支えてきた——たとえば「進歩」などという——「大きな物語」はその役割を終えた。あるディスクールを正当化する特権的なディスクールは存在しない。存在するのは、多様で異質な「言語ゲーム」——そして、それら相互に通約不可能な「言語ゲーム」のあいだで繰り広げられる「抗争」だけである。異質なものの接触——それは「差異」に対するセンスと、この「抗争」に生き残るための力を磨

いてくれる。みんな違うのだ。解りあえっこないじゃないか。調停してくれる者だっていない。ならば、この「抗争」の渦中を生き延びるすべを身につけるしかない、と²⁾。

だが、それにしても妙な話だ。このようなディスクールをリオタールは誰に向かって語っているのか。言うまでもない。自己とは異質な他者に向かってである。解りあうことのできない他者に向かってである。解ってもらえないことを知りながらも語る。そんなことができるのか。リオタールは自分の主張を誰にも解ってほしくはないのか。ならば、沈黙していればすむことではないか。「解りあえない」ということを「解ってほしい」と思って語っているのだとすれば——それは「遂行的矛盾」という論理的誤謬を犯している。そう言ってリオタールを批判した者がいた。ハーバマスである。

3. 未完のプロジェクトとしてのモダン

1980年9月11日、フランクフルト市からアドルフ賞を受けたさいに、ハーバマスは「モダン——未完のプロジェクト」と題する記念講演を行なった。この講演の席上、ハーバマスは、「ポストモダン」を「新しい保守主義を登場させてきたある種の心情傾向」³⁾と喝破し、新保守主義者たちは「さまざまな現象がいまや快楽主義に見えたり、献身的姿勢や服従的態度が欠如していると思えたり、地位を求める能力競争からの脱落と感じられてしまったりというわけで、それらすべての責任を直接にモダンの文化に押しつけようとする」⁴⁾と語る。しかし、ハーバマスによれば、新保守主義者たちのあいだに蔓延するこの不快感は、モダ

1) ポストモダニズムを自称する思想家は——リオタールを除くと——それほど多くはない。J.デリダ、G.ドゥルーズ、M.フーコーといった思想家たちは、しばしばポストモダニズムと同一視されるが、むしろポスト構造主義という命名がふさわしかろう。

2) ここで、N.ボルツによる簡潔な定義を引いておこう。「ポスト・モダンという単語は、そのポストという接頭語によって「(後にいる)」という感情 (feeling of 'being after')」を表示している。それはまずは、解放されたといった契機を表している。つまり我々はこれまで近代(モダン)と呼ばれてきた不快感から解放されたという契機である。ポスト・モダンというこの新しい時代はところが、自分は『新しい』という自己主張をしない。『ポスト』という名前をつけたような画期的なプロジェクトはありえない。なにが来るかを知らないことこそ、アヴェンギャルドにおける幸福強制の提示からようやく抜け出した生活における固有の魅力である。ポスト・モダンは、未来を想像することの不可能性とアイロニカルに折り合うことである」(N.ボルツ「アンチ・モダン プロ・モダン ポスト・モダン」三島憲一訳、岩波講座 現代思想14『近代／反近代』、岩波書店、1994年、15頁)。

3) J.ハーバマス『近代——未完のプロジェクト』三島憲一編訳、岩波現代文庫、2000年、6頁。

4) 同書、18頁。

ンの精神に忠実であろうとする文化人や知識人たちのせいではない。それは「経済的および行政的合理性にのっとった一面的な近代化」⁵⁾が、「単なる合理性とは異なった基準、ようするに対話的合理性 (kommunikative Rationalität) の諸基準に依拠した生活領域に進入してきている」⁶⁾ことに起因している。

ここで「単なる合理性」と言われているものは何か。それは、いわゆる「目的合理性」——すなわち、すべてを目的—手段の連関のもとにとらえ、ある目的を達成するには、どのような手段を選んだらいいかを、効率よく迅速に決定する合理性である⁷⁾。しかし、ハーバマスによれば、そのような合理性はモダンの合理性の一面にすぎない。なぜなら、モダンの合理性には、目的合理性とならんで、対話的合理性が含まれていたからである。対話的合理性とは、「討議」を重ねることによって、異質な他者とのあいだに「合意」を形成していく力である。ハーバマスは、この対話的合理性に一縷の望みを託しながら、モダンを「未完のプロジェクト」と規定する。それゆえ、「モダンとその企て自体を失敗だったと見てはならない」⁸⁾。モダンの合理性を否定するあまりに、目的合理性とともに、対話的合理性までも否定することは、「産湯とともに赤子を流してしまう」ことに等しいのである。

4. モダンの先鋭化

ここでの目的は、リオタールとハーバマスの論争に決着をつけることでもなければ、両者のどちらかに軍配を上げることでもない。ここで注目したいのは、リオタールが「ポストモダン」をもたらしたのは「ポスト工業社会」と「情報技術」であるとしている点、そしてハーバマスが「ポスト

モダン」は「新保守主義」の台頭を許した「心情傾向」であるとしている点である。

「ポスト工業社会」に関して言えば、それが産業構造が物質中心から情報中心に変化したことを示す概念であるなら、この概念は今日もなお一定の有効性をもつものであろう。しかし、「情報技術」に関して言えば、リオタールの予想をはるかに超えて、そしてハーバマスには予想もつかなかったほど⁹⁾、急速な高度化をとげた。ハーバマスが構想した「理性を具体的に体现するコミュニケーション的行為の実践において形成される連帯共同体」¹⁰⁾は、もはや誰の目にも明らかのように、インターネットに取って代わられたと言ってもいい。世界中に張りめぐらされたネット上を多様な情報が飛びかうさまは、ハーバマスの目には「歪められたコミュニケーション」あるいは「生活世界の植民地化」の最たるものと映ったであろう。

しかし、このような通信技術の高度化をもたらしたものの——それこそ目的合理性にほかならない。目的合理性は何よりも効率性と迅速性を重んじる。だから、非効率であるもの、遅速であるものは、真っ先に切り捨てられる。情報の伝達は効率的であればあるほどいい。なぜなら、それだけ情報は迅速に伝わるからだ。情報の伝達は迅速であればあるほどいい。なぜなら、それだけ情報は効率よく伝わるからだ。このロジックに潜んでいるもの——それは〈新しいもの〉への飽くなき追求である。情報は新しければ新しいほどいい。少しでも伝達に要する時間が長ければ、その情報にはすぐさま〈古いもの〉というレッテルが貼られる。

だが、どの情報が〈新しいもの〉であり、どの情報が〈古いもの〉なのか、それを裁定する「メタ情報」はない。次から次へと現れては消えてい

5) 同書、20頁。

6) 同書、20頁。

7) だから、企業体の維持存続という目的のために、従業員の解雇という手段をとることが、「合理化」と呼ばれるのである。

8) ハーバマス、前掲書、35頁。

9) ボルツは、「ニューメディアの現実について適切な概念を提示していない」(ボルツ、前掲論文、12頁)と言って、ハーバマスを批判している。

10) 同論文、9頁。

く、その真偽のほども明らかにされないままに消えていく、多様な情報、異質な情報、通約不可能な情報が、それぞれ自らの妥当性要求を掲げながら乱立する。そこにあるのは、多様性であり、差異性である。したがって、リオタールの言う「ポストモダン」は、目的合理性の追求の果てに、言い換えればモダンの延長上に出現した光景である。「差異」に対するセンス、「抗争」を生き抜く力など、単なる「情報処理能力」にすぎない。「ポストモダン」は新しい時代を画する概念ではない。いや、むしろ「ポストモダン」が新しい時代を僭称するのであれば、それこそ〈新しいもの〉を求めるモダンのロジックのなかを動いていることを証明することになろう¹¹⁾。そして、モダンのロジックのなかを動いているかぎりにおいて、それは〈古いもの〉として消え去る運命にある。

しかも、〈新しいもの〉と〈古いもの〉との区別がつかない以上、そこでは容易に〈古いもの〉が〈新しいもの〉の衣をまとして登場しうる。この事態こそハーバマスが「ポストモダン」を「新保守主義」の台頭を許容した「心情傾向」と評し

た所以であろう。「新保守主義」——これを「新自由主義」と言い換えても異論はあるまい。いまや、私たちは「ポストモダン」という言葉を捨て去るべきである。そして、高度情報社会がもたらしたグローバリゼーション、そして新古典派経済学の「先祖返り」とも言うべき「新自由主義」という表題のもとで貧困を語るべきではないのか。もはや許された紙幅も尽きた。最後に、続稿への橋渡しとして、次のテーゼを掲げることをもって筆をおくことにしたい。

モダンが終焉を迎えるとき。それは貧困の撲滅でなければならない。それが無理だというのであれば、せめて人類の破滅にだけはならないことを願う。

追記：ハーバマスとボルツからの引用にさいしては、表現上の統一を図るために、「モデルネ」を「モダン」に変えるなど、若干の修正を施した。訳者の三島憲一氏のご寛恕を希う次第である。

11) その意味では、ポストモダンは「自分は『新しい』という自己主張をしない」というボルツの発言は、正鵠を射ていることになるだろう。